**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第２回　（２０１４年７月１日）**

**・前回勉強会の追加コメント**

　　**・(5)~(6)頁「ベンガル語のタイトル」の追加コメント**

**（前回の解説より👉「甘露」を飲んだ者は永遠になるという教えが聖典にある。有限な肉体のレベルで永遠になることはできないが、我々は魂のレベルで、永遠になることができる。）**

魂を理解しようとするとき、まずは**我々の人格のレベル**についての理解が必要です。

**ヨーガ哲学**に、**パンチャ・コーシャ（５つの）**という概念がありますね。

1. アンナマヤ・コーシャ（肉体の鞘。たとえば、皮膚、骨、血など）
2. プラーナマヤ・コーシャ（生命エネルギーの鞘）
3. マノーマヤ・コーシャ（心の鞘）
4. ヴィッギャーナマヤ・コーシャ（知性の鞘）
5. アーナンダマヤ・コーシャ（自我の鞘）

**ヴェーダーンタ哲学**では、これをもう少し細かく**７つのレベル**でとらえています。

1. 肉体のレベル
2. エネルギーのレベル
3. 感覚のレベル
4. 心のレベル
5. 知性のレベル
6. 記憶のレベル
7. 自我のレベル

どちらの考えにおいても、**人格の基礎は魂**です。**内なる自己**です。**アートマン**です。

肉体のレベルは具体的にどのようなものか、お分かりでしょう。

エネルギーのレベルも分りますね、我々はエネルギーがなければ動けない、またそれはほとんど食事にっています。

感覚のレベルでは、認識器官（目という器官を使った視覚、耳という器官を使った聴覚、など）と行動器官（手、足、・・・）を使って、見たり聞いたり触ったりします。

心のレベルは、考え・感情・想像・願い、知性のレベルでは、分析・意思決定・識別・発

見をします。

記憶のレベルでは、（前世のことも今生のことも）覚える、メモリー。そして自我のレベル。

自我のレベルから、「私」「私の」という考えが生じます。「私の」からだ、「私の」家族、「私の」食べ物・・・これら自我のレベルから生じた、「私」「私の」を、みずからと同一したとき、そのときに、執着が生まれ、束縛があらわれるのです。この状態を**無知**と言います。反対に、もし、自我が「魂」と同一すれば、自由と至福と知識があらわれ、恐れがなくなります。

**ポイントは、自我のレベルがとっても大事だ**ということ。それとからだを同一している限り、からだがなくなると私もなくなるのではないか、という死の恐怖から逃れることはできません。しかし、**自我が、魂と同一したとき、自我の性質は魂の性質となるのです──魂は永遠、魂は無限──。『ラーマクリシュナの福音』は、それがエッセンス**です。

　**・(７)頁「『福音』の実録」の追加コメント**

Ｍさんは、帰宅したその日に、メモとして書き起こしていました。それはときどき真夜中まで、ときどきは朝までかかることもありました。そしてあとになって、瞑想をして、Ｍさんはすべてを思い出して、『福音』としてまとめたのです。

**・(７)頁「ラーマクリシュナのメッセージの舞台」の追加コメント**

　ドッキネッショル寺院や周囲の自然の雰囲気の描写が、『福音』にはたくさんありますね。

Ｍさんは、物語のライターというより、映画監督みたい。

映画のベースはもちろん物語ですが、そこには、登場人物がどこから出てくるか、舞台セットはどのようなものか、などの詳細は書かれていません。

しかし『ラーマクリシュナの福音』には、その人がどんな顔で居たか、ドアの近くに座ったか、ベッドの上か、部屋の外の雰囲気がどうであったかなど、すべて書いてあります。本当に映画みたい。**言葉でつくった映画**です。『福音』を読むと、すべての場面をはっきりと想像することができます。

Ｍさんはのちに言っています。なぜそこまで詳しく描写したのか。

その目的は**瞑想のため**です。我々が瞑想をするときに、イメージをしやすくする、その助けのためです。言葉だけよりも、情景・雰囲気すべてを思い浮かべたほうが想像しやすいでしょう？　これは大事なポイントです。

**・第２回の勉強範囲：「第二版の出版のことばと序文」(8)~(9)頁**

・📖（読む）**「シュリー・ラーマクリシュナのさまざまな気分」**

**聖人伝としての『福音』の顕著な特徴に、シュリー・ラーマクリシュナのさまざまな気分が描かれていることが挙げられる。ときには難解な哲学を、逸話を交えたり日々の生活の例を拾い上げて説明された。ときには歌ったり、踊ったり、からかったり、物まねをしては、見る者を抱腹絶倒させられた。しかし次の瞬間には、神聖な言葉や歌にわれて、サマーディの内に神との深淵な交流に没入したのだった。息をむ沈黙と驚愕のうちに、人びとの目は周囲を忘れた師のお姿に釘づけとなった。このサマーディはまったく自然に起こるもので、まわりの人々にもいつどこで起こるか皆目見当がつかなかった。**

（解説）

この点も『福音』の特別な点。

霊的な話のムードは、たいがいシリアス（真面目）でしょう？

聖書を勉強していて、あるいは、お釈迦様の聖典を勉強していて、「笑う」という状況はありますか？

しかし『ラーマクリシュナの福音』の勉強のとき、笑うことはいっぱいあります。

その上、シリアスなムードだけではなく、次の瞬間とってもライト（シリアスの反対。遊びの雰囲気）、そして次の瞬間、サマーディ。

それがとってもとてもおもしろいのです。通常の聖典はシリアスだけ。『ラーマクリシュナの福音』は**シリアスとライト**。

そしてそのライトネスも、**神様を中心にしたライトネス**です。『福音』には、家族についての話など、ときどき世俗的な会話も出てきます。しかし中心は神様です。冗談もある、物語もある、しかしその中心は神様。歌もある、踊りもある。一般的にはそれらは世俗的なものですが──『福音』の歌と踊りの中心は神様。

お釈迦様の教えにたとえ話や物語はたくさん出てきます。でもないものがある。それはなんでしょうか？　踊りです。（笑い）お釈迦様は説法の時、とつぜん踊りを始めない。イエス、突然、歌わない。しかしラーマクリシュナは歌っています、踊っています、そしてまったくヘンではない。その反対。みなさん、とっても楽しんでいました。

・・・私の望みは、ラーマクリシュナの話を聞くよりも、ラーマクリシュナの踊りが見たい、歌がききたい！　助言の言葉は忘れることがありますが、しかしラーマクリシュナの踊りを一度見たら、忘れることはできないです。タクール（シュリー・ラーマクリシュナ）の踊り、タクールの歌、それは本当にスペシャル。これはラーマクリシュナの人格の特徴です。

Ｍさんによる記録があったから本当に良かった、とっても特別です。

みなさんは話、歌、踊り、どれを見たいですか？　私の希望は、踊りと歌。合わせたほうが一番いい！（笑い）そしてそれが『福音』の中にぜんぶあります。

そのとき信者はとてもおだやかな状態になりました。だからうちに戻りたくなくなりました。時間の感覚がないかのように、３時間、４時間、６時間を過ごしました。

ふつう、おもしろくなければ時間が気になりますね。時計が気になって、これからの予定を考えたりします。でも、話がおもしろければ時間の感覚がなくなります。これは話している人にも、聞いている人にも起こることです。

アメリカで、ときどきスワーミージーは２時間ずっと話し続けました。時間に厳しいアメリカ人でさえ、スワーミージーが話し出すと、その感覚を失ったのです。サウザンド・アイランド・パークでの講演は、３時間、４時間、ときには夜を徹して！続きました。スワーミージー自身もいつ始まりいつ終わったか分らないほど、食事の時間さえ忘れるほどでした。

『福音』の中でタクールは、信者と３時間、４時間、あるいはそれ以上共に過ごしました。

また、信者にとってメニューはたくさんある──話、冗談、歌、踊り、物まね、・・・。（笑い）だからみなさん帰りたくなかった。ときどき、世俗的な人が来て、すぐ時間を気にし始めることもありました。しかし信者は少しでも長く居たかった。

もうひとつ。**この瞬間笑い、次の瞬間サマーディ**。ふたつの両極端のコンビネーション。それがとてもおもしろい。

これはラーマクリシュナの直弟子も同じでした。ブラフマーナンダジもスワーミージーも、この瞬間とっても笑っている、次の瞬間サマーディ。

まわりの人は理解できず、ただびっくりするだけでした。『福音』の中にいくつかその描写があります。サマーディの状態、サマーディの経験は普通の人にはわかりません。外見は、ただ静かに見えるだけです。その状態は、英語で ”Pin drop silence” （針が落ちる音が聞こえるほど静かな）と表現するほど静かな状態でした。

・📖（つづきを読む）**師は、ドッキネッショルのみならず訪問先のカルカッタなどでも、あたりを振動させるかのごとく霊性と溢れだす至福で、同様の雰囲気をかもし出された。こうして行く先々を「歓びの市場」へと変えていかれたのだ。**

**師との集会の唯一のテーマは神であった。それは、実際にはほとんどシュリー・ラーマクリシュナのひとり語りだったが、『福音』に引き込まれていくと、知らず知らずのうちに自分も師のおで夢中になって耳を傾けているかのような感覚になる。あらゆるご気分にある師を見つめ、楽しみ、すっかり心が奪われてしまうのだ。事実、『福音』の研究に退屈したり、読み飽きたりすることが決してないのはこのためで、むしろ読むたびに楽しく爽快に感じられる。そのうえ『福音』は、神聖で偉大な知識と歓びをもたらしてくれる、たぐいまれな人生の道連れとなってくれるのである。**

（『福音』勉強会第２回、以上）